

ニーナ・ゲルト……ハンスの娘 ソロモンとの恋に苦悩する

ハンス・ゲルト……ドイツ軍少佐 妻を亡くし娘を溺愛する父でもある

シスター・ハナ……秘密のミサを続ける修道女

ソロモン・・・ポーランドから来たレジスタンス

コニー……ハンスの友人でソロモンの支援者 クリスチャン

リーケ……コニーの妻
陽気で元気な情愛深い女性

アンニヤ……コニーの娘
かわいなお転婆

ヤン・・・新聞記者
やや無鉄砲な青年

ルドルフ・ハンセン・・・ゲシユタポ(ナチス秘密警察) 冷酷無比

ヨーゼフ・アドラー・・・ナチス高官 ハンスの上司であり盟友

アビ・・・オランダ籍のユダヤ人

マルゴ……アウシユビツツに連行されたユダヤ人女性

カール・・・ドイツ郊外の若い農場主 アンニヤを保護する

フローラ・・・カールの妹
アンニヤを世話する

サニ・ニナの曾孫の女兒

クロフォード医師・・・ハンスの主治医 精神科医

愛犬ソロモン・・・サニーの愛犬

ナレーション・・・93歳のニーナ

.....

愛犬と庭で遊ぶサニ－の笑い声。

サニー「あははは、だめよソロモン、それは食べてはいけないわ。ほら、かえして！あ！ソロモン！・・・もう、お腹を壊してもしらないから」

ニーナ（93歳）「サニ、こっちへ来てお茶にしない？あなたの好きなラズベ

「リーのタルトが焼けたわよ」

サニー「わー、素敵！わたし、おばあちやまのタルトが世界で一番好きよ！」

ニーナ「あらあら、世界一だなんて嬉しいわね。さ、ちゃんと召し上がれ」

サニー「いただきまーす！（もぐもぐ）おいしい！」

ニーナ「そう、よかつたわね」

サニー「おばあちやまは世界で一番何が好き？」

ニーナ「私？・・・そうね、私が一番好きなもの、それは平和よ」

サニ「平和？……ふーん」

N（ニーナ93歳）「1945年。私は、父親と二人でドイツのベルリンにある小さなアパートメントで暮らしていたわ。戦争は日に日に激しくなつて、窓の外から聞こえてくる行進の音がとてもこわかった。父親はドイツ労働者党の高官だったけれど、本当は戦争を憎んでいたのよ。優しい人だった」

◇ハンス家

ニーナ「おかえりなさい、父さん」

ハンス「ああ。変わりはないかったかい？」

ニーナ「ええ、何も。寒かったでしょう？いま暖かいコーヒーを入れるわ」

ハンス「コーヒーは・・・いいよ」

ニーナ「？・・・じゃあ、暖炉に薪をくべますね」

ハンス「ありがとう、ニーナ」

ニーナ「今日もたくさんの人達が、連れて行かれますね」

ハンス「・・・ああ、そうだね」

ニーナ「父さん・・・どうにもならないのかしら・・・こんなことがいつまで続くの？」

ハンス「ニーナ、そんなことを口にしちゃいけない。お前に何かあったら、父さんは・・・」

ニーナ「ごめんなさい・・・でも、ユダヤ人というだけでなぜそこまでするの？あの男は気狂いよ！どうかしてる！血に飢えた悪魔よ！」

ハンス「ニーナ！やめないか！総統（フューラー）の事は口にするなど言っていないだろう！どこで誰が聞いているとも分からないんだぞ！」

ドアがノックされる音。

ハンス「しっ！静かに・・・どなたですか？」

シスター「私よ、ハンス」

ハンス「（息を吐き）どうぞ、シスター」

シスター「どうしたの？大きな声が聞こえてたわよ。ニーナ、こんばんは。変わっていない？」

ニーナ「ええ、シスター。ごめんなさい、少し父と喧嘩を」

ハンス「たいしたことじゃありませんよ、ご心配なく」

シスター「ならいいけど。ところで、もうそろそろ時間ね。今日は何人くらいいらつしやるのかしら？」

ハンス「私たちを入れて、7人です」

シスター「そう・・・だいぶ寂しくなったわね」

ハンス「はい・・・政府によるキリスト教会への弾圧は日増しに強くなっています。今後いつまで、こうして秘密裏に集まってミサを開けるのか・・・時間の問題でしょう」

ニーナ「カトリック修道者たちがドイツ国外に金を密輸したなんて噂が広まっていますね」

シスター「デマですよ。ナチスはローマにまで銃口を向け、あらたにドイツ・キリスト教を奨励し始めました。あの忌まわしい鉤十字を旗印に」

ドアをノックする音。

ニーナ「あ、来たわ」

部屋に入ってくるリーケ、コニー、アンニヤ、ヤン、そしてソロモンの4人。

ハンス「やあ、コニー、リーケもよく来たね。アンニヤ、元気だったかい？」
コニー「ハンス、久しぶりだな」

握手を交わすハンスとコニー。

リーケ「まったくお転婆で困っているのよ」

アンニヤ「ふん！ママに似ているねって、みんな言うわ。ね、ソロモン」

ソロモン「あ、ああ・・・」

ヤン「ハンスさん、おじゃまします」

ハンス「やあ、ようこそ、ヤン君。新聞社の仕事の方はどうだい？」

ヤン「別に相変わらずですよ。最近じゃ上に言われたことを、だらだらとタイプイングしてるだけですからね。今日もまた、ソヴィエト軍を追撃！モスクワ陥落近し！」
「ってね。いけね、ハンスさんは少佐殿でしたね。忘れてください、なにとぞ穩便に」

ハンス「(笑) 愉快的な男だな・・・ところで、彼は？」

コニー「あ、父さん、紹介するは」

ソロモン「初めまして、ハンスさん。突然おじゃまして申し訳ありません」

リーケ「ごめんなさい、ハンス。あなたが警戒するのはよくわかってるわ。敬虔なクリスチャンだった奥様が、ナチスの目を逃れながら守ってきた秘密のミサですもの。知らない人間がいきなり現れたら不審に思うのも無理はないわね。でも、ソロモンは大丈夫よ。アンニヤの従兄弟なの。コニーの兄弟の息子さん。心配はいらないわ」

ソロモン「ソロモン・ベルンハルトといいます。実は、ハンスさんにお願いが」

コニー「ソロモン！」

ハンス「？どうした、コニー」

コニー「あ、いえ・・・そうそう、復活祭が近いでしょう？卵の代わりに何かないかなあって。見つかるはずでしょう？だから、ね、そうよね、ソロモン」
ソロモン「いや、僕は」

コニー「ソロモン！・・・そうよね？」

ソロモン「！・・・ええ、目立つことは出来ないから、何かいいお知恵をお借りできないかなと、思っで・・・これでいいの？(つねられ) 痛っ！」

コニー「とりあえず、みんな揃ったし、ミサを始めましょ！シスター、宜しくお願ひします！」

シスター「いいのかしら？ハンス。はじめさせていただきます」

ハンス「・・・ええ、始めましょう」

ミサの準備を始める一同。

◇コニーの庭

コニー(93歳)「ソロモン。私が人生ではじめて好きになった人よ」

サニー「えー！ソロモンと同じじゃない！」

コニー「あははは、大当たり」

サニー「ソロモン！あなた聞いた？あなたの名前はおばあちやまの初恋の人よ」

◇ハンス家

ニーナ「今日も素敵なミサだったわね。それにアンニヤったらずいぶんおませになつてたわ。ね、そうは思わないこと？ねえ……父さん？」

ハンス「ずいぶん親しそうだね」

ニーナ「え？」

ハンス「ソロモン……いつから」

ニーナ「……1ヶ月くらい前です」

ハンス「1ヶ月？……コニーの家でかい？」

ニーナ「……はい。11月のアンニヤの誕生日パーティーの日に」

ハンス「なぜ、黙っていた？」

ニーナ「そんな……次のミサの日に、今日の事ですけど、ちゃんと紹介しようと思つていたんです」

ハンス「じゃあ、なぜ」

ニーナ「父さんが！……父さんが彼を避けているみたいだったから、なかなか切り出せなくて……」

ハンス「まさか、結婚を前提になどとは言わないだろうね」

ニーナ「……」

ハンス「ニーナ？」

ニーナ「はい、父さん。わたし、わたしたち真剣に愛し合っているんです」

ハンス「なんだって」

ニーナ「彼は……来年の春がきたら、結婚しようって、そう言ってくれました」

ハンス「何を馬鹿な！」

ニーナ「父さん！」

ハンス「全体に駄目だ！許すことなど出来ない！出来るわけがない！」

ニーナ「父さん！どうして！？彼のどこがいけないの？私は幸せになつてはいけないといの？」

ハンス「なにを言ってるんだ！私はお前の幸せだけを」

ニーナ「だったらどうして！……ねえ、父さん、お願いよ……私の話をちゃんと聞いて」

ハンス「……駄目なものは駄目だ……」

ニーナ「……寂しいから！？母さんが死んで、私がこの家を出て行ったら、自分がさびしいから、だから結婚を反対するの！？」

ハンス「そうじゃない！そうじゃないんだ」

ニーナ「じゃあなぜ！？なんだっていうのよ！」

ハンス「彼は駄目なんだ！……彼だけは」

ニーナ「……なによ……彼がなんだというの？」

ハンス「ソロモン・ベルンハルト……まぎれもなく、ユダヤ人の名前だ」

今日も聞こえてくる行進の喧騒。

N「父、ハンス・ゲルトは差別主義者ではなかった。だけど、自分の娘がユダヤ人と結ばれた先に訪れるであろう不幸を恐れていたわ。だけど、私たちを待っていたのは、恐れていたものの以上の、あまりにも残酷な未来だった」

◇コニー家

ささやかなパーティーを開いている。

シスター「天にまします我らの父よ、あなたの御子イエスをこの地上に送ってくださりありがとうございます。私たちにとって人生がいつも楽であるとは限りません、しかしあなたがいつも私たちと共にいてくださる事を知っています。あなたのことばにあるように、あなたは決して私から離れる事はなく、私を見捨ててる事もありません。私たちに一致をくださり、またいつも必要を満たしてください。ありがとうございます。来る年も私たちの絆が強まりますように。あなたを心から愛します、そして今日の祝日が私たちにとって、素晴らしい日となりますように。イエスの御名によって、アーメン」

みんな「アーメン」

リーケ「さあ、食事にしましょう。何もないけれど、腕によりをかけたのよ」

コニー「リーケのミートパイは最高だからね」

アンニヤ「母さん、私、手伝うわ」

リーケ「まあ、めずらしい。じゃあスープの準備をお願いするわね」

シスター「なんだか少し、アンニヤは大人っぽくなったわね」

コニー「そうですか？シスター、僕にはまだまだ」

アンニヤ「ありがとうございます、シスター！父さんは時々しか私と話をしないから気づかないのよ。ねえ、母さん」

リーケ「そうね、このところは特に難しい顔ばかりして（笑）」

コニー「仕方がないだろう、仕事がいそがいそいだから」

シスター「家族のために頑張っているのに、家族にいろいろ言われたんじゃないやコニーも可愛そうね（笑）」

アンニヤ「それはそうね。父さん、ごめんなさい。父さんには一番大きなミートパイをあげるわね（笑）」

コニー「まいったなあ（笑）」

一同、笑い。（アドリブ）

ソロモンが帰ってくる。

ソロモン「ただいま。いやあ、外はすごい雨ですよ」

アンニヤ「おかえりなさい、ソロモン」

コニー「おかえり、ソロモン」

ソロモン「ただいま、おじさん。すみません、お祈りの時間までには帰るつもりだったんですが」

コニー「ソロモン・・・あまり、不必要にうろつくんじゃないぞ」

ソロモン「僕なら大丈夫ですよ、おじさん。逃げ足だって早いし」

コニー「ソロモン、ふざけている場合じゃ」

激しくドアをたたく音。

リーケ「・・・何かしら？」

ルドルフ（ゲシュタポ）「開けろ！今すぐドアを開けろ」

コニー「いかん！ゲシュタポだ！・・・アンニャ！ソロモンと一緒に奥の部屋に隠れていなさい！」

アンニャ「どうして隠れなきゃいけないの？なんにも悪いことなんかしてないのに」

コニー「いいから言うことをききなさい！ソロモン、行きなさい！早く！」

ソロモン「・・・でもみんなは！？」

コニー「行け！頼むから行ってくれ」

ソロモン「・・・はい、アンニャ行こう」

コニー「・・・何があっても出てくるなよ。いいな、ソロモン」

ソロモン「・・・わかりました」

奥の部屋に隠れるソロモンとアンニャ。

それと同時に飛び込んでくるゲシュタポ。部屋の中を見回す。

ルドルフ「コニー・ローゼンハイム」

コニー「・・・はい」

ルドルフ「国家反逆罪の容疑で逮捕する」

リーケ「コニー！」

コニー「静かに！リーケ」

ルドルフ「半年前から内偵は進行していたんだ。お前はナチ黨員にも関わらず、国家の発展を妨げている」

コニー「そんな・・・」

ルドルフ「言ってみろ」

コニー「・・・は？」

ルドルフ「ハイル・ヒトラーと言ってみると言ってるのだ」

コニー「・・・はい・・・ハイル・ヒトラー・・・」

ルドルフ「声が小さくて聞こえん。もう一度」

コニー「・・・ハイル・ヒトラー！」

コニーに近づき、胸元を探るゲシュタポ。衿の内側からロザリオを引っ張り出す。

ルドルフ「これはなんだ？」

コニー「・・・」

ルドルフ「貴様、この十字架はなんだと聞いているんだ！」

シスター「おやめください！」

ルドルフ「何だお前は？ははん、お前は聖職者だな？」

コニー「違います！違います！この人はただの友人で、夕食に招いただけで」

ルドルフ「ふざけるな！」

コニー「・・・嘘じゃありません・・・」

ルドルフ「国民が総統（フューラー）と共に一丸となって戦っているというのに、貴様らはのんきに飯を食いながら、禁じられた異端の教義に頭を垂れているのか！？」

コニー「・・・お許しを・・・どうかお許しを・・・」

ルドルフ「許す許さないは私が決めることではない。全て、総統（フューラー）

閣下がお決めになることだ」

シスター「この二人を許してあげてください。彼らは今日の事を境に信仰を閉ざし、心を改めて我が国家のために尽くすことでしよう。しかし私は生まれた時から、イエス・キリストとともに歩んできました。今後も決して信仰が揺らぐことはないでしょう。そんな私のような聖職者が消えてゆけば、あなた方の理想へ近づけるのではないですか？国民は国力の象徴です。いたずらに肅清して何になりますか？ね？私を、私だけを連行してください。あなたにも家族があるはずですよ。私は一人、私には主イエスだけです。ね？どうか、どうかこの二人を連れて行くことはやめて・・・」

ルドルフ「（微笑む）」

シスター「ああ・・・神よ」

ルドルフ「何と言った貴様。この場でイエスに会わせてやろうか？」

拳銃をシスターに突きつける。

ルドルフ「ソロモン、ソロモン・ベルンハルトはどこだ？」

コニー「・・・」

ルドルフ「内偵は済んでいると言っただろう。ポーランドから忍び込んできた薄汚い鼠はどこだと聞いているんだ」

コニー「・・・いない」

ルドルフ「いない？」

コニー「そんな奴は知らない・・・ここにはいない」

ルドルフ「そうか、いないんだな。それじゃあ、その奥に隠れているお嬢さんにご挨拶だけさせてもらおう」

コニー「やめろ！やめてくれ・・・娘は関係ないんだ、何も知らないんだ」

ルドルフ「もう遅い」

部屋に入ろうとするゲシュタポ。逆上したコニーがミートパイのナイフをつかむ。

ルドルフ「どうした？そんな安物のナイフで何をしようって言うんだ？」

コニー「んぐう・・・があー！！」

叫びながらゲシュタポに襲い掛かるが、撃たれて床に倒れるコニー。

リーケ「コニー！」

ルドルフ「奥の部屋を見てこい」

部下「は！」

戻ってくる部下。

部下「いません」

ルドルフ「逃げられたか。シスター、お望み通り、お前だけ連れて行こう。かわいそうだから、夫婦は一緒にしてやろう」

リーケを撃つゲシュタポ。かわいた銃声

シスター「リーケ！・・・ああ・・・」
ルドルフ「行くぞ」

連行されるシスター。

◇ハンス家
ノックの音。

ハンス「・・・どなたですか？」

ルドルフ「私です。ハンス少佐」

ハンス「・・・入りましたまえ」

ルドルフ「夜分に失礼いたします」

ハンス「ルドルフ・・・どうしたんだ？こんな時間に」

ルドルフ「は。時間も時間ですので要点だけお伝え致します。実は、内偵を進めていたレジスタンスの支援者の家に、国家反逆罪の容疑で、先ほど踏み込みました」

ハンス「・・・そうか。それで？」

ルドルフ「小佐もよくご存じのコニー・ローゼンハイムの家です」

ハンス「・・・なに？」

ルドルフ「コニー・ローゼンハイムはナチ党员です。それにもかかわらず、やつはポーランドから潜入してきたレジスタンスを支援しておりました。自宅にかくまいながら」

ハンス「・・・」

ルドルフ「ポーランド系ユダヤ人、ソロモン・ベルンハルト、ご存じないですか？」

ハンス「・・・」

ルドルフ「小佐、ヒトラー青少年団（ヒトラーユーゲント）時代のよしみでお伝えに上がりました。奴はコニーの娘をつれて逃走しました」

ハンス「！」

ルドルフ「ご自重くださいますね？私もつらいところです。あなたを逮捕するようなことになるのは忍びない」

ニーナ「アンニャが・・・」

ハンス「・・・私にどうしろと？」

ルドルフ「もし何かわかったら、必ず私に連絡をください。いいですね？」

ハンス「・・・わかった」

ルドルフ「亡くなられた奥様が敬虔なクリスチャンであつたことは存じています。しかし、時代は変わったのです。今、信奉すべきはナチズム、お分かりですよね？」

ハンス「・・・妻の話は、やめてもらおう」

ルドルフ「失礼しました。それでは私はこれで」

帰っていくルドルフ。

ニーナ「ソロモンがレジスタンスですって？そんな、そんな馬鹿な」

ハンス「・・・彼はおそらく、情報を探るためにお前に近づいたんだ。お前と仲良くなつて私から軍部の情報を探ろうと」

ニーナ「違うわ！彼はそんな人じゃない！何てひどいことを言うの！いくら父さんでも許さない！」

ハンス「もういい！・・・彼とおまえは、もう終わったんだ・・・とにかく、コニーの家に行つてくる。コニーが心配だ。」

出ていくハンス。泣き続けるニーナ。

N「その時の私には、いったい何が起きたのかよくわからなかったわ。ただただ、愛する人を失うかもしれない恐怖と絶望感で、一晚中泣いているしかなかった」

◇ヤンの家

ヤン「大丈夫、つけられてはいないようだね」

ソロモン「すまない、ヤン。恩にきるよ」

ヤン「いいつてこと。だけど・・・アンニヤは、大丈夫かい？」

アンニヤ「泣き続けている」

ソロモン「首を振る」

アンニヤ「私、家に帰らなきゃ。父さんと母さんを置いてきてしまったもの」

ソロモン「アンニヤ！駄目だよ・・・今ここを出ちゃいけない」

アンニヤ「なぜ？何も悪いことしてないのに、なんで出てはいけないの？・・・父さんと母さんに何かあったらどうしよう・・・帰らなくちゃ」

ソロモン「駄目だ、いけないよアンニヤ！・・・アンニヤ、聞いてくれ、お願いだ、落ち着いて、アンニヤ・・・アンニヤ！」

アンニヤ「・・・」

ソロモン「アンニヤ・・・落ち着いて聞いておくれ。僕は・・・君の従兄弟なんかじゃないんだよ」

アンニヤ「・・・え？それ、どういうこと？従兄弟じゃなつて・・・じゃあ、誰？あなたは誰なの！？」

ソロモン「すまない、アンニヤ！僕は・・・僕はね、ナチスの政権を打倒するためにポーランドから来たレジスタンスなんだ」

アンニヤ「・・・ポーランド？」

ソロモン「ああ。ポーランド、チェコスロバキア、オランダ、オーストリア、そしてフランス。今や各国のレジスタンスは連携してる。力を合わせて奴を倒すんだよ。さもないと、このヨーロッパは取り返しがつかないことになる」

ヤン「そういうことさ、アンニヤ。辛いかもしれないけど、今はこの屋根裏部屋に居るのが一番安全だ」

アンニヤ「ヤン？あなたもレジスタンスなの？」

ヤン「いや、僕はしがない新聞記者さ。だけど時々、こうして同胞の手助けをしてる」

アンニヤ「同胞？」

ヤン「ああ。でも・・・そろそろ来るかな」

ノックの音。

ヤン「あ、来た来た。どうぞ開いてますよ」

アンニヤ「誰が来たっていうの？あ！まさか、父さんと母さん！」

立ち上がり迎えに行くアンニヤ。しかし入ってきたのはゲシユタポたち。

ソロモン「どうしてここが・・・」

ルドルフ「ご苦労だったな、ヤン」

ヤン「いえ」

ソロモン「ヤン・・・お前まさか・・・俺たちを売ったのか？」

ヤン「ごめんな、ソロモン。このご時世だろ、頭使わないと生き残れないからさ。それにこうでもしなけりや、ユダヤ人の俺が今だに新聞社で働き続けられるわけないだろう？でも驚いたよ、コニーさんの家からとくに連行されてると思ってたお前が、俺の家に現れるんだもの。しかもアンニヤまで連れて」

アンニヤ「・・・父さんと母さんはどうなったの？」

ヤン「さあね」

ソロモン「お前がナチスのスパイだったなんて・・・ヤン・・・貴様！」

ヤン「おっと、お前だってスパイだろうが？情報欲しさにハンスの娘をたぶらかそうとしやがって」

ソロモン「それは！」

ヤン「あの娘、いいよなあ、悪いけど俺がいただくぜ。バイバイ、ソロモン、最後の審判で会おうぜ」

ルドルフ「すまん、ヤン。お前も来てもらうぞ」

ヤン「え？どういうことですか？」

ルドルフ「何がだ？お前もれつきとしたユダヤ人だろう。お友達と仲良く、今夜の汽車に乗ればいい」

ヤン「そんな・・・それはないだろう！」

銃で殴られるヤン。

ヤン「うぐっ！」

ルドルフ「調子に乗りすぎたな、ヤン」

連行されていくソロモンとアンニヤ。そしてヤン。

◇アウシュビッツ強制収容所

ひとつの部屋に入れられたソロモン、アンニヤ、そして先に居たマルゴー、アビの2人。泣き続けるアンニヤ。

アビ「大丈夫かい？君」

ソロモン「ありがとう、アンニヤは僕が見ているから大丈夫です」

マルゴー「あらあなた、アンニヤっていうの？私の妹と一字違い」

アビ「へえ、君の妹は？」

マルゴー「アンネよ」

ソロモン「妹さんは一緒じゃ？」

マルゴー「・・・收容所の門までは一緒だったんだけど、その後、別れ別れにされてしまったの」

アビ「可愛そうに・・・」

マルゴー「でもこの收容所のどこににいるはずだから・・・きつとまた会えるわよね？」

ソロモン「会えますよ、もう少しで」

マルゴー「え？何故そんなことが言えるの？」

アビ「そうだよ。ここはアウシュビッツだよ、君は分かっているのかい？」

ソロモン「ええ・・・アウシュビッツ・・・僕らはこう呼びます。オシフィエンチム」

アビ「君、ポーランド人か」

ソロモン「ええ、ここはアウシュビッツなんかじゃない、ポーランドのオシフィエンチムなんです」

マルゴー「それでどうして、妹にまた会えるなんて言えるの？」

ソロモン「戦争はもうすぐ終わる」

アビ「本当かい！？」

ソロモン「ええ！僕はレジスタンスです。ナチス・ドイツに蹂躪されたヨーロッパ各国とも連携しています。その情報網から、アメリカとイギリスのドイツ本土への攻撃は激しさを増しています。制空権は連合軍がほぼ握ったと思って間違いない。ドイツの敗戦は、時間の問題です！」

アビ「そうか、そりゃすごいな！そうになったら俺たちもここから解放されるんだよね！？」

ソロモン「もちろん！」

マルゴー「すごい！そうになったら家族みんなで、パパもママも、みんなまた一緒に暮らせるのよね！？ああ、早くそんな日が来ないかしら！」

顔をあげるアンニヤ。

アンニヤ「本当？ソロモン、また家族と暮らせるって・・・本当に本当？」

ソロモン「ああ、大丈夫だよ。必ずまた会える。信じて頑張ろう」

アンニヤ「うん」

そこにどこから戻ってくるヤン。

ソロモン「ヤン！どこに行ってたんだ！？」

ヤン「シー！でかい声出すなよ！」

アンニヤ「近づかないで！この人殺し！」

アビ「なんだって！？」

マルゴー「人殺し！？」

ヤン「・・・許してくれなんて言わないよ」

アンニヤ「許さない。絶対に許さないわ」

ヤン「・・・わかったよ。君の好きにすればいいさ・・・ここに連れてこられてはじめて、自分のしてきたことの愚かさに気が付いた・・・君の望む死に方で俺

は死ぬよ。だけどその前に、ここから出ていこうぜ」

ソロモン「出ていく？」

アビ「ずいぶん乱暴な話だな。だけど俺たちにも聞かせろよ」

ヤン「なんだこいつらは？」

ソロモン「ついさつき話をしたばかりだ、でも・・・仲間を敵に売ったりしない、
本当の仲間さ！」

ヤン「チッ！」

◇収容所 夜

ソロモン「つまり、この建物の西側の端にある金網のフェンスを、今夜そいつが
人ひとり通れる分だけ切っておいてくれるというわけか？」

アビ「大丈夫なのか？ 罨じゃないのか？」

ヤン「嫌なら来るな！ もともとお前なんか」

ソロモン「やめろ、ヤン！」

ヤン「はん！」

ソロモン「だが確かに問題は、その看守が信用できるかだ」

ヤン「そりゃ100パーセント信用できるわけじゃないだろうが、こうしてたら
明日にだって、あの暗いガス室に放り込まれちゃうかもしれない・・・それだっ
たらイチかバチか、俺が懇意にしていた元将校のお情けにかけてみるほうが、まだ
ましつてもんだろう？ な？ そうじゃねえか？・・・大丈夫、あいつには昔、ずい
ぶん儲けさせてやったんだ。うまく逃げられたら、3000マルク払うって言っ
てある。がめついあいつのことだ、かならず」

アビ「俺はこの話・・・のる」

ソロモン「アビ・・・」

アビ「だってそうだろ？ どうして俺たちがこんなところで死ななきゃなんな
い！？ 俺はオランダのアムステルダムで自転車屋をやってたんだ。毎日毎日、手
を油まみれにして自転車を修理したり、隣の花屋の娘に明日の天気予報を口実
にして、なんとかデートに誘おうと頑張ってみたり、毎日毎日、本当に毎日毎
日・・・どうして俺がこんな目に合わなきゃいけないんだ！ 俺が何をした！ 俺は
まだやりたいことがいっぱいあるんだ！・・・逃げよう・・・な、ソロモン・・・
逃げよう」

ソロモン「・・・」

ヤン「ソロモン」

ソロモン「わかった・・・やろう」

ヤン「よし」

明滅する光とサーチライト。収容所の敷地。西側フェンス沿いを進む5人。

ヤン「・・・このあたりのはずなんだけどな」

ソロモン「確かなのか？」

アビ「・・・！そこじゃないか！？」

ヤン「どけ！・・・違う、ロープが絡まってるだけだ」

ソロモン「クソ・・・」

マルゴー「わぁ、見て！すごい星よ」

アンニヤ「本当！昔、父さんたちと登ったブロッケン山の夜空を思い出すわ・・・もう一度行けるかしら」

ソロモン「・・・大丈夫、必ず行けるよ、必ず」

空を見上げて十字を切るアンニヤ。

アンニヤ「アーメン」

マルゴー「アンニヤ、あなた、クリスチャンなの？」

アンニヤ「ええ、そうよ」

ヤン「そして、彼女は歴としたオランダ系ドイツ人さ」

マルゴー「まあ！ユダヤ人じゃないの？」

アビ「そんな・・・じゃあ、なぜこんなところに？」

ソロモン「僕が・・・僕のせいでアンニヤをこんな目に・・・アンニヤ、必ず君をここから助け出すからね、この命に代えても」

アンニヤ「うん。でも必ず一緒に逃げましょ」

ソロモン「アンニヤ・・・」

ヤン「さあ、手分けしてフェンスの穴を探そう」

手分けして探し始める。

アビ「ちきしょう！いくら探してもありやしないじゃないか！騙されたんだ！俺たちはまた騙されたんだ！」

ヤン「うるさい！静かにしろ！・・・俺は確かに」

ソロモン「あつたぞ！穴があつたぞ！」

アビ「本当か！？」

突然、機銃の銃声が鳴り響き、強い光に照らされる5人。

看守達の声「Bewege dich nicht-」

◇ナチス本部

地下にあるヨーゼフの執務室。

ヨーゼフの横にはルドルフ。沈痛な面持ちのハンス。

ヨーゼフ「ハンス、君はこの戦況をどう捉えている？」

ハンス「ハ！我がドイツ軍は必ずや連合軍の上陸作戦を阻み、第三帝国樹立に向けて邁進するであろうと」

ヨーゼフ「もういい！聞いた私が馬鹿だった。そう答えるしかないものな」

ハンス「いえ、私は本当に」

ヨーゼフ「嘘をつけ。イギリス軍の空爆は昼夜の区別なく好き放題行われるようになり、ベルリンは今では瓦礫のオブリジェと化した。おかげで総司令本部は地下にもぐり、総統（フューラー）はじめ幹部連中はモグラのごとき暗闇生活を余儀なくされている」

ハンス「・・・しかし」

ヨーゼフ「勝てる気なんてしてないだろう。おそらく総統（フューラー）さえもな。しかし・・・引き下がることなど出来るわけがない！アーリア人の誇りとナチス・ドイツの名誉にかけて！」

ヨーゼフ・ルドルフ「（揃えて）ハイル・ヒトラー！」

ハンス「・・・」

ヨーゼフ「ハンス、地下室の特徴はなんだかわかるか？」

ハンス「？・・・いえ」

ヨーゼフ「いいよ、ハンス。もう楽にしてくれ。約束したろう？三人だけの時は、ユーゲント時代のおとり、階級も役職も忘れて、あの頃のままの友人に戻ろうって。そうだよな？」

ルドルフ

ルドルフ「は」

ハンス「それでは・・・アドラー大臣、あ、いや、ヨーゼフ、こんな時に時間を割いてもらったのはわけがあつて」

ヨーゼフ「焦るなよ、ハンス。俺の質問が先だ。地下室の特徴はなんだ？ん？わかるか？」

ハンス「地下室の・・・特徴？」

ヨーゼフ「そうだ、簡単だろ？地下にある！なんてのは駄目だぞ（笑）」

ハンス「・・・」

ヨーゼフ「教えてやろうか？」

ハンス「・・・ああ」

ヨーゼフ「まずいいところはだな、窓がないから、集中できる。雑音もない。時間さえない。思う存分自分の考えに没入できる。思索には最高だ」

ハンス「・・・そうか」

ヨーゼフ「しかし悪いところもある。聞きたいか？」

ハンス「・・・聞かせてくれ」

ヨーゼフ「食欲がない。何も食べたなくなる。お前も知つての通り、俺の楽しみはしゃべることと食べることだった。そうだよな？」

ルドルフ「は」

ヨーゼフ「この4日間で私が口にしたのは、レーズンと焼栗に、バームクーヘン4分の1だ。どうだ？少ないだろう？」

ハンス「・・・そうだな」

ヨーゼフ「そうだなじゃない。問題だぞ、これは。だが、頭だけはどんどん冴えてくる。聞いたことがある。同盟国の日本には、自ら食事を絶ち、生きたまま墓に入り、少しずつ死んでいくブデリスト達がいそうだ。心配なんだ、知らぬ間に私も、そんな風になつてしまったんじゃないのかつて。どうだい、ハンス。私はまだ生きてるように見えるか？」

ハンス「・・・」

ヨーゼフ「（笑）それで、今日は何の話をしにきたんだ？」

ハンス「・・・ああ・・・実は、救ってもらいたい人間がいる」

ヨーゼフ「だれだ？」

ハンス「アンニャ・ローゼンハイム。オランダ系ドイツ人、私の友人の娘だ」

ヨーゼフ「何があつたんだ？どこにいる？」

ハンス「・・・わからない」

ヨーゼフ「わからない？」

ハンス「・・・ルドルフなら、わかるはずだ」

ヨーゼフ「なぜだ？」

ハンス「彼女を連行したのは・・・ルドルフだからだ」

ヨーゼフ「本当か？ルドルフ」

ルドルフ「はい、連行しました。ローゼンハイム一家はユダヤ人のレジスタンスを自宅に匿う支援者でした。娘はレジスタンスとともに逃亡していたところを押さえた、つまり現行犯です。現在はアウシュビッツへ移送されたはずですよ」

ハンス「なんだって！アンニヤをアウシュビッツに・・・なんてことだ・・・頼む！ヨーゼフ！いやドイツナチ党アドラー大臣にお願いする！彼女を、アンニヤを助けてやってくれ！頼む」

ヨーゼフ「そうはいつでも、レジスタンスと一緒にいた者をそう簡単には」

ハンス「あの子は何も知らずに連れ去られただけなんだ！レジスタンスはアンニヤをいざという時の人質として連れていったんだ！だから、だからあの子をあんな、アウシュビッツだなんて、どうか、ヨーゼフ！」

ヨーゼフ「どうする？ルドルフ」

ルドルフ「あなたにまかせますよ。ヨーゼフ」

ヨーゼフ「わかった。言っておこう。アウシュビッツの“死の天使”が微笑みかける前にその娘を見つけ出せとな」

ハンス「ありがとう、ヨーゼフ・・・恩に着る」

ヨーゼフ「終わりか？」

ハンス「・・・ああ」

ヨーゼフ「では、帰れ」

ハンス「・・・失礼した」

部屋を出ていくハンス。

ルドルフ「いいんですか？ハンスはキリスト教徒です。だいたいあなたは、昔からハンスに甘い」

ヨーゼフ「なんだ？嫉妬しているのか？」

ルドルフ「・・・」

ヨーゼフ「地下室のいいところがもう一つあった」

ルドルフ「・・・」

ヨーゼフ「中の音も世界には聞こえないことだ」

◇ガス室

逃げ損じて連れ戻され、数日後、ガス室に連れてこられた5人。

アビ「ちくしょう！もう少しだったのに！なぜあの時撃たれてもいいから、フェンスを潜り抜けて逃げなかったんだ！ちくしょう！ちくしょう！」

マルゴ「やめて・・・出来なかったこと悔やんだって、もう仕方ないじゃない」
アビ「貴様だ！貴様があんなデマを持ち込んでこなけりや、俺たちはまだ生きていられたはずだ！」

ヤン「ふざけるな！俺はお前なんか誘っちゃいないぞ！お前が自分で、望んでこの話に加わったんだろうが？呪うなら自分の血と、ツキのなさを呪うんだな」
アビ「なんだと！」

マルゴー「やめて！もうやめて……ここがどこだか、わかってるんでしょ？」

ヤン「……ああ……アウシュビッツの悪名高きガス室だよ」

マルゴー「……今、何時頃かしら……」

ヤン「……」

マルゴー「アンネが……妹のアンネがね、誕生日なの」

ヤン「……誕生日？」

マルゴー「ええ……私が数え間違えてなければ、今夜12時を回れば6月12日、アンネの誕生日よ」

ガス室に入ってくる看守に連れられたシスター。

シスター「今日は4月11日、明日はまだ4月12日よ」

ソロモン「シスター！どうしてここに！？」

アンニヤ「シスター！（泣）」

マルゴー「……そんな……2ヶ月も数え間違えてたなんて……そんな……」

シスター「アンニヤ、かわいそうに……」

ソロモン「シスター、ご無事だったんですね……よかった」

シスター「ソロモン……」

アンニヤ「そうだ、シスター、父さんと母さんはどうしたの？無事なのよね？元気なのよね？」

シスター「……」

アンニヤ「シスター？……ねえ、シスター、何か言つてよ、大丈夫なのよね？父さんたち、生きてるのよね！？」

ルドルフが入ってくる。

ルドルフ「ああ、生きているよ。大丈夫だ、アンニヤ・ローゼンハイム」

アンニヤ「……本当？」

ルドルフ「私を信じなさい」

アンニヤ「……」

ルドルフ「ハンス少佐を知っているね？ハンス・ゲルト、君の父上の親友だ」

アンニヤ「……ええ」

ソロモン「アンニヤ、答えるな、毘かもしれない」

アンニヤ「でも、ハンスおじさんよ……」

ルドルフ「ハンス少佐が君を助けるように私の上司に頼みに来た。彼と私はヒトラー・ユーゲント時代の先輩後輩の中でね、非公式ではあるが、私は引き受けた。君を助けよう」

ソロモン「本当か！？アンニヤをここから出してくれるのか？」

アンニヤ「みんなは？みんなも一緒じゃなきゃ嫌、一人だけ助かるなんて、私出さない」

ソロモン「駄目だ、アンニヤ、君はいくんだ！僕らは僕らの運命を受け入れる。」

「ただ君は関係ない！君はドイツ人だ、ここで殺される理由なんて一つもない」
アンニャ「ユダヤ人が殺される理由だって何ひとつないわ！だってこんなおかしいもの、運命なんて受け入れないで！いやよ、ソロモン、一緒にいたいのに、一緒になきゃいや！いや・・・」

ソロモン「・・・ありがとう、アンニャ・・・だけど、お願いだ、君だけでも助かってくれ。そして世界中に今言ったことを伝えておくれ。僕らが殺されなきゃいけない理由なんて、何一つなかったんだってことを！」

引き離されるソロモンとアンニャ。

ソロモン「アンニャー！」

アンニャ「ソロモン！」

アンニャを連れて出ていくゲシュタポたち。
ドアと鍵のしまる音。

ヤン「・・・シスター？」

シスター「私はあなたたちに最後の祈りを捧げにきたのよ」

ソロモン「最後の・・・祈り？」

シスター「ええ」

アビ「怖いよ・・・どうなっちゃうんだよ、俺たち、怖いよ」

シスター「しっかり手をつなぎなさい。私も一緒に天国に行くわ」

ヤン「なんだって・・・」

ソロモン「ニーナ・・・ニーナ・・・愛するニーナ・・・ごめんよ、ごめんよ・・・」

シスター「ねえ、ソロモン、あなたとニーナがソウルメイト、魂の伴侶であるならきつとまた、必ずまた彼女に会えるわ。どんなに離れていても、どんなに時が巡ろうとも。いいわね？」

ソロモン「・・・はい」

シスター「天にましますわれらの父よ、願わくは、御名の尊まれんことを、御国の来たらんことを、御旨の天に行わるる如く地にも行われんことを。われらの日用の糧を、今日われらに与え給え。われらが人に赦す如く、われらの罪を赦し給え。われらを試みに引き給わざれ、われらを悪より救い給え。アーメン」

徐々に充滿してくるガス。

◇ドイツ郊外

さわやかな森の奥の草原。花を摘むアンニャ。アンニャを探しに来た少女・フローラ。

フローラ「アンニャー。アンニャー！どこに行ったの？兄さんが心配しているわ」
アンニャ「アンニャ？・・・わたし・・・」

フローラ「アンニャ！もうアンニャったら、また勝手にこんなに遠くまで来てしまつて、何かあったらどうするのよ」

アンニャ「うふふ」

フローラ「まあ、いいわ。また私が探せばいいんだし。ね？アンニヤ」

微笑み花摘みを再開するアンニヤ。

フローラ「そうだ、あのね、アンニヤ。アンニヤを訪ねてお客さまが来てるのよ。だからもう家に帰りましょう？ね？」

アンニヤ「うふふ」

花摘みを続けるアンニヤ。そこにフローラの兄・カールがハンスとニーナを連れて現れる。

カール「アンニヤ、ここに居たのか。フローラ、ありがとう。もういいよ」

フローラ「ううん、アンニヤは私の友達なもの、全然かまわないわ。いつでもどうぞ」

カール「アンニヤ、君にお客さんだ。どうしても、早く君に会いたいらしくて。

一緒に来てしまったよ」

ハンス「・・・アンニヤ」

ニーナ「アンニヤ？・・・アンニヤ！」

アンニヤ「・・・あなた、誰？」

ニーナ「アンニヤ？どうしたの？私よ、ニーナよ」

アンニヤ「ニーナ？・・・ごめんなさい、知らないわ」

ニーナ「アンニヤ・・・」

カール「・・・ゲシュタポの将校がこの子を預けに来た時、すでにもうこんな状態でした。自分の名前さえ分からなくて」

ハンス「記憶・・・喪失？」

カール「さあね。記憶がないというよりは、覚えられないみたいな感じですよ。いや、覚えたくないのかな、さぞ辛い経験をしたんでしょう。だけど妹のフローラは懲りずに毎朝、私はフローラ。あなたはアンニヤ。いい？覚えた？」ってやってますがね。ここは人がほとんどいない田舎ですから、フローラは嬉しいみたいです」

ハンス「ルドルフは、ゲシュタポの将校はなぜアンニヤをここに？」

カール「よくは分からないけど、人が少ないから空襲もあまりなくて、比較的安全だからでしょう。1年分の世話代なんかももらっちゃったし・・・妹を養わなければいけないから・・・それになんといつても、ナチスの命令を断れるわけがない」

ハンス「そうか・・・だが、ルドルフは・・・あいつはアンニヤに何をしたんだ・・・この子をこんな目にあわせるなんて」

カール「旦那、この国はどうなっちゃうんですか？」

ハンス「分からない・・・私には分からないが・・・総統（フューラー）は、ヒトラー閣下は・・・昨日、亡くなった」

カール「え！それは本当ですか？」

ハンス「我がドイツ軍は、敗北する・・・総統（フューラー）なき今となつては、時間の問題だ」

カール「戦争が終わる・・・戦争が終わる！やった！ついにこのクソみたいな戦

争が終わるのか！フロラ、聞いたか？戦争が、戦争が終わるんだぞ！」
ハンス「……くそ！間に合わなかった！……1ヶ月月、あと1ヶ月早ければ、こんなことには……こんなことには！」

N「忘れもしない4月30日。あの男は自らに撃鉄を引き、命を絶った。本当は私も死んでしまいたかった。だけど父が心の病を患ってしまい、そんな父を残して死んでいくことも出来なかったの」

◇診察室

クロフォード医師「こんにちは。精神科医のクロフォードです。昨日からあなたの主治医になりました。覚えてらっしゃいますか？」

ハンス「……ああ、先生。覚えています」

医師「よろしい。今日もすこしづつ記憶を整理していきましょう。いいですか？」

ハンス「先生、私は……私は！」

医師「落ち着いて。まずは目を閉じて、ゆっくり深呼吸をしてください」

ハンス「……」

医師「落ち着きましたか？」

ハンス「はい……」

医師「それではゆつくりと心の奥底へ降りて行ってください。ゆつくりでいいですよ」

ハンス「……ああ……」

医師「では昨日の続きです。何が見えますか？」

ハンス「アウシュビッツの強制収容所だ……ああ、すまない、許しておくれ」

医師「なぜ謝るのですか？あなたは今、どこにいるのですか？」

ハンス「……車の中だ。コニーの家に行くとゲシュタポがコニーとリーケの遺体運び出していた。その車を尾行したら、このアパートに着いた」

医師「それから？」

ハンス「しばらくすると、アパートからアンニャとソロモン、それからヤンが連行されて出てきた。私は車を飛び出してルドルフに詰め寄った。しかし奴は……」

医師「どうしました？」

ハンス「ユダヤ人と、それをかくまっていた者。どちらも同罪、強制収容所行きだと……私は、友人の娘と、自分の娘の好きな男を助けることが出来なかった……」

医師「なぜですか？」

ハンス「私は……何も言えず、何もできず、結局、そのまま……自分かわいさに、彼らを見捨てたんだ……（号泣）」

医師「ハンスさん、あなたのせいじゃない。戦争ですよ。すべて戦争のせいだったんです」

◇ヨーゼフの執務室

ヨーゼフ「春の花といえば、何だったかな」

ルドルフ「スマレ、タンポポ、チューリップ、でしょうか・・・私の田舎では木蓮がきれいでした」

ヨーゼフ「珍しいな？」

ルドルフ「何がでしょうか？私が花の名前など知らないとしても」

ヨーゼフ「違う。君が自分の田舎の話をするのは初めてだ」

ルドルフ「そうでしたか？・・・しかし、あなたこそ花の話なんて」

ヨーゼフ「終わりだな」

ルドルフ「・・・お諦めになりますか？」

ヨーゼフ「もともと嫌いだ、戦争なんて」

ルドルフ「・・・好きなものなど、いるのでしょうか？」

ヨーゼフ「閣下はお好きだったろう。『わが闘争』、歴史的ベストセラーだ。駄文だがね」

ルドルフ「まさに」

ヨーゼフ「死んだ者を悪く言う趣味はないが、部下を見捨ててさっさと自決するとは。しかも遺書によって、私を後継者に指名した。いい迷惑だ・・・」

ルドルフ「お供しますよ、ヨーゼフ」

ゲッペルス「悪いな、ルドルフ一人は嫌いなんだ」

お互い、銃を抜き銃口を相手に向ける。とどろく二発の銃声。

◇ニーナの庭

サニー「（しくしく泣いている）おばあちゃま、かわいそう」

ニーナ（93歳）「ありがとう、サニー・・・悲しい時代だったわね。何が正しいのかもわからないような。でもね、恋する気持ちだけは、誰が何と言おうと本物だった。だから、恋をしなさい。恋をすれば全部わかるわ。あなたが何者で、どうして生まれてきたのかも全部。さ、お茶をもう一杯どう？」

愛犬ソロモンの心配げな甘えた声。

おわり